

ボランティア社会で子育て

南カリフォルニア
南加岐卓卓人会100周年からの風

2



地元高校で、出迎え車列の風景

初渡米の1976年から35年目を迎え、米国で家族を持ち2人の子宝にも恵まれた。表題の子育ては専ら細君の役目となり、今更ながら頭の下がる思いだ。かつて、週末の深夜に救急病院の窓口で診察を断られた事がある。30分ほどかけて保険証を忘れた事や治療拒否での訴訟話も持ち出して何とか診察を受けた。医療費の高騰で健康保険料の値上がりが大きい。全米の2割近い世帯が健康保険

に未加入とも言われ、来院患者全てを受け入れられない実情もある。最初の出産では細君の陣痛が始まるや病院に向かったが、早いと追い返された。翌日、再度来院し一晩過ごし出産を終えた。すると同室の女性は自分も昨日出産を終えたので午後には退院すると話した。米国では、出産はレイバー(労働)であり病気ではないそうだ。車社会の口サンゼルスでは、ドライブの機会が多い。

学校では授業が終わる午後3時頃には、出迎えの親連が待機する長い車列が続く。そのまま学習塾やスポーツ活動へハシゴする事になり、親連は子供に合わせ移動する。

日本では小学生になると電車で一人通学をさせるが、誘拐事件などが多い米国では中学生までは親の送り迎えが一般的だ。また16歳から運転免許取得が可能で高校の高学年ではハイスクールドライバーも増える。ちなみに生徒用駐車場には新車や高級車が並び、その奥の教員や職員用駐車場に中古車が目立つのは考えさせられる。

日米ともにスポーツへの関心は高い。米国ではバスケット・ボールとフットボールの人气がダントツだ。シーズンが始まる10月末から、週末は応援をかねて家族全員で試合会場へと遠征が続く。

小学生から高校生あたりまで続く。試合後に娯楽イベントが組まれ、全てボランティア活動だ。また小学校の授業でもヘルパーとして父兄が子供達の勉学を手助けし、ボランティア社会の姿が見られる。(文・奥田貞沖)



奥田貞沖 1976年に渡

米。米国不動産プロパティマネジャー。不動産コンサルタントとして

て、日本で管理業務の講演や業界誌に連載中。土岐市出身。57歳。